

小倉昭和館は旦過市場にあるお稲荷さんのすぐそば。1号館では邦画、2号館では洋画が主に上映され、平日でも朝から人が並ぶことも多々ある。少し懐かしさを感じさせる壁に飾られたケースには、スタッフたちが厳選した上映作品のポスターが並ぶ。ポップコーンや軽食が鎮座する昔ながらのショーケースもこの映画館ならではのワンシーンといえるだろう。

特集 カタカタ カタカタ、キネマの旅。
映し続けて77年、小倉昭和館の軌跡。

旦過市場の一角にある映画館『小倉昭和館』は77年の間、小倉で映画を流し続けてきた。今回はそんな映画館の今昔物語。



街と共に時を刻み、欠かせない場所となる。

変わり続ける街の中で、変わらない場所として愛される映画館。

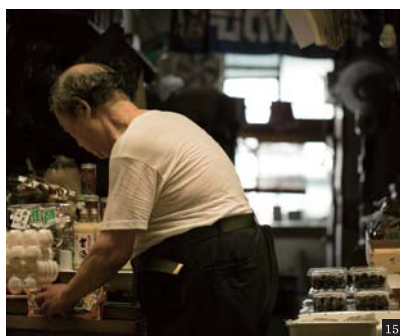
昭和14年（1939年）に映画館兼芝居小屋として創業した『小倉昭和館』。創業当時から昭和40年ごろまでは、映画は街の人たちの最大の娯楽で、この昭和館も系列館をここ以外に3つ経営していた。それから時代は移り変わり、現在映画館の主流がシネマコンプレックスとなった今も、北九州のカルチャー発信地としてこの場所は多くの人に愛されている。

当時の面影を残しながら、確実に変わりつつある小倉と共に77年間歩んだこの映画館の館主を務めるのは樋口智巳さん。彼女は小倉昭和館を通して、小倉の街とどう関わるかを話してくれた。

「この街は新しいものを吸収する寛容さがありながら、古いものを残そうという優しさも持っています。この映画館が残っているのもそんな気質によるものなかもしれません。現在は最盛期のころと比べると人口は減っています。しかしその現状を受け止めもう一度活気を取り戻そうと意識する人もたくさんいらっしゃいます。うちにはたくさんさんの座席や大きなスクリーンもありますので、そんな方たちといっしょに街の賑わいを作るお手伝いができればと思います。」

この映画館は創業当時からも変わらず街と共に時を刻んでいる。そしてきつとこれからも同じスタンスで小倉の街を見続けるのだろう。

[1]小倉北区の小倉駅と小倉南区の企救丘駅を19分で結ぶ北九州モノレール。[2]北九州を代表する大型複合商業施設、リバーウォーク北九州。[3]細川忠興公が築城した名城・小倉城。[4・5]小倉中央商店街の入り口には人気ベーカリー「シロヤベーカリー」がある。[6]北九州市の花「ひまわり」が描かれる中の橋（太陽の橋）と日本におけるトリックアートの第一人者・福田繁雄氏が手がけたオブジェ。[7~18]小倉昭和館のある旦過市場。昔ながらの商店が100店舗以上並ぶこの市場は100余年の歴史を誇る。現在、河川整備が計画されており、5年後には景色がガラリと変わる。





1作品目と2作品目の間には、館主自ら販売サービスを行う。この時カゴに入れられるのは食べきりサイズのモノが多い。また時期や時間によっては目過市場の惣菜店とコラボしたお弁当を販売することもある。ちなみに館内への持ち込みは自由。ただし上映の邪魔になる音のなるモノや匂いの強いモノは避け、気持ち良く過ごして。

映画を愛する人のために 映画館ができることをする。

作品を作る人と観る人、それぞれの想いが集まる映画館。
だからこそ、彼らのためにできることを全てしたい。

お客様に喜んでもらえることを考え、その準備をすることがとても楽しいと話す

樋口館主。彼女が企画したサービスは多岐に渡るが、年に一度開かれる「オールナイト上映」もその一つ。また、売店のラインナップもこの館ならではの工夫が。ポップコーンなどの定番のお菓子に加え、地元のお店や障がい者支援施設の商品を置いたり、時には映画と連動した軽食を用意することもある。また以前から好評の2作品上映（1100円!）も継続中。樋口館主は企画やサービスにこだわる理由についてこう話した。「映画は映画館で上映されることを前提に作られています。大きなスクリーンで観賞することで映画本来の面白さが体験できます。また、映画館で観るという非日常も映画を楽しむエッセンス。私たちはそれを味わっていた

だくためのプラスアルファのお楽しみとしてイベントやサービスを企画しているんです。」

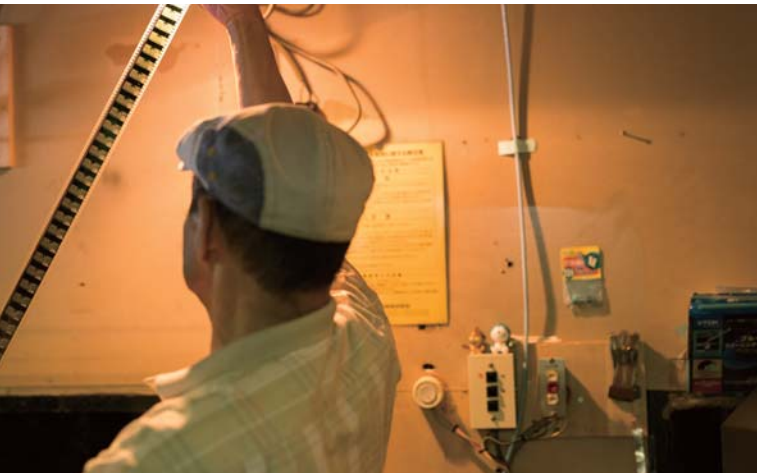
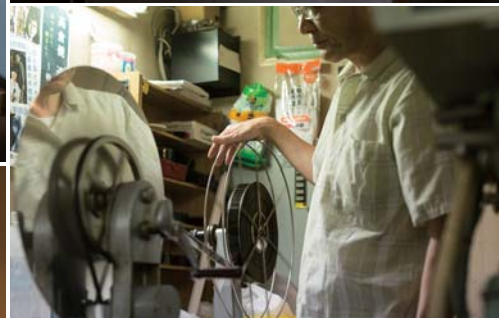
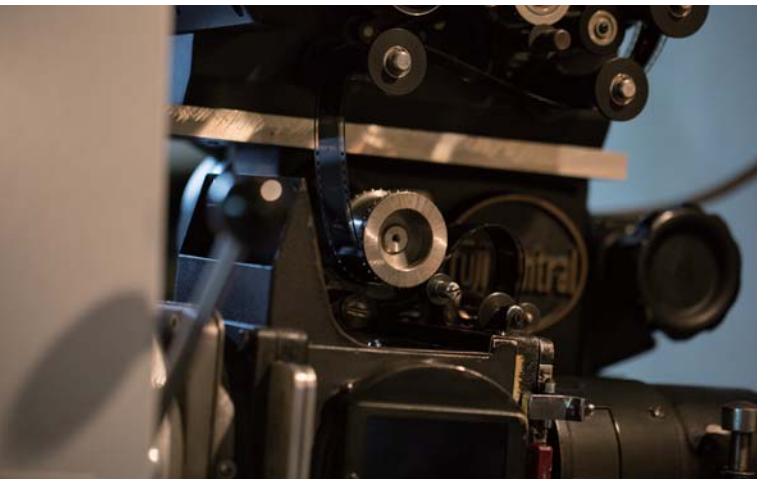
そんな樋口館主も映画館に戻ってきた当初は不安で仕方なかったそうだ。

「この仕事を始めた時はすでに映画館業界が下火で、私もこの館がいつまで存続できるか不安でした。その想いを映画『あなたへ』にエキストラ出演した時にお話させていただいた高倉健さんへ感謝の気持ちと共に手紙に綴って送ったんです。すると高倉健さんから『現状は厳しいですが、それを受け入れてがんばってください』という厳しくも温かいお返事があり、それをきっかけに館主を名乗るようになりました。」

戦前から日本の名優を支えてきた映画館は、その名優たちから贈られる温かい声援を受け今も存続している。



創業当時の小倉昭和館は、芝居小屋もあったので片岡千恵蔵や阪東妻三郎といった名役者もここに集った。当時の映画館の座席数は600席で、スクリーンは1つ。上映は邦画のみだったそう。現在事務所を構えている2階には、芝居小屋だった当時役者の控え室だった部屋が今も残っている。1号館には宮大工に作らせた神棚が鎮座している。祀られているのは商売繁盛のご利益があるお稲荷さん。



フィルムとデジタル、それぞれの良さも悪さも知る椎葉さんはまさに小倉昭和館の生き字引のような存在。昔のフィルムを眺めるその後姿に映画人の貴祿を感じさせる。また映写室の壁に飾られる注意書きや大入袋の封筒も、映画館の歴史を物語っている。

昔の名作のために 今も現役のフィルム映写機。

デジタル映写機が主流になった今でも
過去の名作が観られるここではフィルム映写機も活躍する。

「この映画館では新しい作品だけじゃなく、フィルムでしか残っていない古い映画も上映しますから。今は私が若い子たちにデジタルを教えてもらい、私がフィルム映写の技術を教えています」と椎葉さんは話す。そんな椎葉さん曰く、「デジタルの画像はキレイだし鮮明。全部にヒントが合っている……そんな感じです。逆にフィルムによる映写は距離でピントが甘くなったり色も少し風合いがあります。そこがフィルムの良いところでもあると私は思いますよ」とのこと。作品によってはフィルムの風合いも魅力の一つとなっているのだろう。

ちなみにフィルム映写は静止画を連続して映し出すことで動画のように見せている。こちらの映写機では1秒間に36コマを映し出すそう。こうした知識や映し出す技術を若い技術者に伝えて、過去の作品も観られるようにしている。それはまさに、小倉の街らしい心意気と言えるかもしれない。映写機は昭和60年代ぐらいのものらしいが、オーバーホールすればまだまだ使えたと椎葉さん。

また、ひと時代前のスタイルを守るこの映画館について樋口館主は「最新の映画館にアトラクションのような楽しみ方があるように、当館ではいつもよりゆとりとした時間を楽しんでいます」と話す。だからこそ、まだ小倉昭和館に来たことがない方には、一度足を運んでもらいたい。

映

写機がカタカタと音を鳴らしながら映画を映していた時代からデジタルデータが台頭してきたのは2010年ごろ。たった6年で一気にデジタルデータによる映写が主流になり、フィルム映写機の数も激減。北九州市内でも小倉昭和館以外ではほとんど見ることがなくなった、と映写技師の椎葉さん。小倉昭和館ではデジタルシネマと並んで、今もフィルム映写機が現役で活躍している。

「この映画館では新しい作品だけじゃなく、フィルムでしか残っていない古い映画も上映しますから。今は私が若い子たちにデジタルを教えてもらい、私がフィルム映写の技術を教えています」と椎葉さんは話す。そんな椎葉さん曰く、「デジタルの画像はキレイだし鮮明。全部にヒントが合っている……そんな感じです。逆にフィルムによる映写は距離でピントが甘くなったり色も少し風合いがあります。そこがフィル

昭和40年代の雰囲気を出すため、映画館のポスターは当時のデザインを模したものに差し替わっている。また、エキストラの衣装も時代を感じさせるものに。ちなみに樋口館主もカメラ出演しているそうなので、ぜひそちらもチェックしたい。

映画を映し出す場所が、 ついに映画の舞台となった。

北九州の街や日本映画史の中でも貴重な存在のこの映画館が
映画の舞台となり、来春、スクリーンに映し出される。



「この街は北九州フィルム・コミッションさんの活躍でさまざまな作品が誘致され、映画のロケ地になったり、俳優さんが訪れたりしています。それが北九州市に住む若者たちの誇りにもなっていると私は思います。若い人が誇れる街となるためにも、映画を含めた芸術の発信をこれからも街全体で推し進められたらいいですね。」

街の至る所で新旧の芸術作品に出会い、さらには総合芸術とも言われる映画でも大きなアドバンテージを持つ北九州市。そんな九州のアートシーンを牽引する街で、ここまでの存在感を放つ小倉昭和館はやはり稀有な存在といえる。しかしそれは「ただある」だけでなく、初代、二代目、そして三代目の樋口館主が街と深く関わってきた結果なのだ。来春全国公開予定の、小倉昭和館も舞台になった映画作品で、そのあたりがどう表現されるか今から楽しみで仕方ない。

「この作品では小倉昭和館の名前も出ますし、その他の北九州の街にある名称もきちんと登場するんですよ」と樋口館主。なんでも映画の撮影場所として北九州市が使われることは多くても、地名がそのまま登場することは少ないらしい。しかし樋口館主は映画のロケーションとなることにも十分意味があると話す。

「この取材を行った日、ちょうど小倉昭和館を舞台とした映画のロケが行われていた。早朝から集まり、さまざまな道具や機材を搬入するロケ現場を目にすると、思わずこちらにも緊張が走る。エキストラへの指導や現場スタッフのやり取りはかつて映画やテレビで観たあのワンシーンとほとんど同じで、本当にこんな風にするんだ……と変に納得してしまう。」

「スタート！」や「カット！」という声を静かな旦過市場に響かせながら約2時間で撮影は終了。総勢30名ほどのスタッフは大きな機材と共に次の現場へ移った。

今回の旅のメモ。

今回の旅で訪れたのはこちらです。

profile

小倉昭和館 館主
樋口 智巳

JR関連の仕事で営業職をしていた樋口さんは、結婚を機に退社。しばらく子育てに専念していた。育児がひと段落着いた頃、友人とイベント企画会社を設立。その後小倉昭和館の創業70周年のイベントにゲストとして訪れた女優の有馬稲子さんに「昭和館はあなたが頑張らなくちゃダメよ」という言葉をかけられ、家業に戻ることを考えるようになったのだとか。その後、俳優の高倉健さんから届いた手紙が後押しし、館主に就任する。



access

[公共交通機関で] JR小倉駅から北九州モノレールに乗り換え旦過駅へ。旦過駅から旦過市場方面へ、徒歩約2分。
[車で] 北九州空港から新北九州空港連絡道路、県道245号線、東九州自動車道へ。九州自動車道に入り、北九州都市高速道路1号線を経由、都市高速道路大手町を降り、小倉北区魚町方面へ約7分。

more information

小倉昭和館についてあれこれ。

シアター



小倉昭和館

今年で創業77周年を迎えた老舗映画館。作品を2本立てで上映するスタイルが古き良き昭和を思い出させる。また、さまざまなイベントや俳優の舞台挨拶が多いことでも有名。業界内でも好んでこの映画館に立ち寄る人も多いのだとか。

福岡県北九州市小倉北区魚町4-2-9
☎093-551-4938

web



小倉昭和館 web

上映作品のスケジュールや作品紹介はもちろん、小倉昭和館の77年間の歩みやイベントの案内などもここで確認できる。また、リーガロイヤルホテル小倉やホテルクラウンパレス小倉とコラボしたステイプランもこちらのサイトから予約可能。

<http://kokura-showakan.com>

映画

北九州市オールロケ映画
「グッバイエレジー」

北九州市でクランクインした同市出身の映画監督・三村順一の新作『グッバイエレジー』。この作品は三村監督の足跡を辿ったもので、一度は故郷北九州を捨てた監督役に大杉漣、中学時代の同級生役に吉田栄作、妻役に石野真子、昭和館館主役に藤吉久美子が扮している。男が生きた昭和と現代や帰郷への想い、親友への哀歌を描く感動作。スクリーンに映し出される北九州市の昭和の面影にも注目してほしい。

[監督・脚本] 三村順一 / [製作] 「グッバイエレジー」製作委員会 / [制作協力] シネマステーション北九州 / [出演] 大杉漣、吉田栄作、石野真、藤吉久美子、ほか / [公開] 2017年〜初春(小倉昭和館先行上映、スバル座順次全国拡大)